

# 『枕草子』 〈笑ひ〉 にみる憧れのまなざし、 そしてその実現

李 泰 勲\*

(e-mail : makura2000@hotmail.com)

---

## 目 次

---

はじめに — 〈笑ひ〉 に憧れる清少納言

- 一. 「円融院の御果ての年」の段で笑われる藤三位
- 二. 「職の御曹司におはしますころ、西の廂に」の段で笑われる清少納言

おわりに — 〈笑ひ〉 に対する新しい見方への提示

---

## はじめに — 〈笑ひ〉 に憧れる清少納言

これまで、『枕草子』の〈笑ひ〉にまつわる叙述については、さまざまな角度からアプローチが行われてきた。その中の一つが、日記・回想章段の栄華期と没落期におけるその表現方法の変化への指摘である。これらの指摘の中には、その変化の理由を当時の時代的状况から求め、没落期における〈笑ひ〉は作者の意図的あるいは作為的なものだという見方が存在する<sup>1)</sup>。こういった指摘において栄華と没落を分ける基準となるのは、言うま

---

\* 檀国大学 講師 日本古典文学(中古)

1) その代表的論者として原岡文子が挙げられる。氏は没落期における〈笑ひ〉の頻出を当時の政治的状况によって失われた〈をかし〉の世界の再構築として見ている。「枕草子」日記的章段の笑いについての一試論「平安文学研究」1977 原岡文子、『枕草子』日記的章段の「笑い」をめぐって『源氏物語 両義の糸』1991に所収

でもなく、主君となる藤原定子の一族や定子サロンの政治的状況による没落となろう。よって、これらの指摘は、清少納言の「定子サロンの女房」としての立場がその出発点となるということが言える。しかし、この作品の実際の筆の持ち主が清少納言であるという点で、作者自身の内面を照らして、〈笑ひ〉の叙述の特徴を見ても意味があろう。ということで、本稿では、作者自身にフォーカスをあて、これまでなされてきたアプローチの他、何か新しいアプローチへの模索を試みたいと思う。

次は、作者清少納言の初出仕<sup>2)</sup> 当時を回想した「宮にはじめてまゐりたるころ」段の一場面である。

暁には、とくおりなむといそがる。<sup>かづらき</sup>「葛城の神もしばし」など仰せらるるを、「いかでかは筋<sup>すぢ</sup>かひ御覧ぜられむ」とて、なほ臥したれば、御格子もまゐらず。女官どもまゐりて、「これはなたせたまへ」など言ふを聞きて、女房のはなつを、「まな」と仰せらるれば、笑ひて帰らぬ。物など問はせたまひ、のたまはするに、久しうなりぬれば、「おりまほしうなりにたらむ。さらばはや。夜ざりはとく」と仰せらる。(一七七 宮にはじめてまゐりたるころ)

まだ宮中生活に慣れず中宮定子の前で身を臥している作者の姿と、宮中を生活の場として行き来しながら〈笑ひ〉を見せている女官の姿は、宮中社会の一員になろうとして、まだなりきっていない者となりきった者との克明な対照をなしており、作者の初出仕当時のとまどいが生き生きと伝わってくる。このように、作者は初出仕当時の宮中社会に溶け込まない自身を回想するとき、〈笑ひ〉が存在する宮中の一員同士の輪の外側に自分がおかれていたことをはっきりと覚えていたということが言える。

宮中の一員になりきることへの作者の憧れは、同じ章段の次のような叙述からも窺うことが出来る。

御前近くは、例の炭櫃に火こちたくおこして、それにはわざと人もみず。上臈御まかなひに候ひたまひけるまゝに、近うみたまへり。沈の御火桶の梨絵したるにおはします。次の間に、長炭櫃に、隙なくみたる人々、唐衣こき垂れたるほどなど、慣れやすらかなるを見るもいとうらやまし。御文取り次ぎ、立ちる、行きちがふさまなどの、つつまじげならず、物言ひゑ笑ふ。「いつの世にか、さやうにまじらひならむ」と思ふさへぞつつまじき。奥寄りて三、四人さしつどひて、絵など見るもあめり。(一七七 宮にはじめてまゐりたるころ)<sup>3)</sup>

2) 清少納言の出仕年時については、新編全集『枕草子』の校注者が「作者のこの初宮仕えの年時については正暦二年(九九一)、三年、四年にわたって諸説があるが、二六〇段(正暦五年二月の事を記す)に作者が新参女房として見えることから、正暦四年の冬説(ただし「浅緑」の薄様が用いられていることなどその他から、早春説)が有力だと思われる。」と注を付けている(同書314頁)ように、正暦四年の冬を下限に諸説が存在する。

ここでは、中宮の周りでお仕えしている女房たちの様子が「いとうらやまし」「いつの世にか、さやうにまじらひならむ」と憧れのまなざしで叙述されている。このような、宮中生活に慣れ、すでにその一員の座を得た人々の描写の中にも、「物言ひゑ笑ふ」と〈笑ひ〉が存在することは、注目すべきことであろう。作者の、この時の感興について、沢田正子は次のように述べている。

かかる貴人たちの動静の中に馴れやすらかな女房たちの「ものいひゑ笑ふ（おしゃべりをしにこにこと笑う）」声加わり、異郷の気の花やぎがよく印象づけられているが、この「めでたし」「をかし」「笑い」の感触は宮仕えずれした後のものとは違って鮮烈に彼女の五感を射たものであるだけに、以後の美的感受の貴重なモデルになっているのである<sup>4)</sup>。

上記の指摘のように、「以後の美的感受の貴重なモデル」になる場面描写、つまり貴人たちの動静の中に女房たちの「ものいひゑ笑ふ」声加わっているということは、それが同じ女房たちの〈笑ひ〉という点で、この〈笑ひ〉も作者が「いつしか」と憧れる対象になっていると言える。と同時に、この〈笑ひ〉が本作品の素材になりうる可能性をも示唆していると言えよう。作者がこれから生活していく場で、すでに宮中社会の一員になっている同僚たちの中にはこの〈笑ひ〉が存在しており、作者は宮中の一員になることに憧れると同時に、その中に存在する〈笑ひ〉にも憧れていたということが言えよう。このように、宮中の一員になる事への憧れの中には、〈笑ひ〉もその一要素として存在していたことを押さえておきながら、そのような〈笑ひ〉に対する憧れは、本作品にどのように現れているのかを見てみることにしよう。

## 一．「円融院の御果ての年」の段で笑われる藤三位

この段の記事の年時は冒頭に「円融院の御果ての年」となっていることから、一条天皇の父の円融院の崩御した正暦二年（991）より、ちょうど一年後となる正暦三年（992）になることが分かる。この年時は、清少納言の初出仕年時を通説の正暦四年（993）に従うなら、出仕以前の記事となるので清少納言が直接目撃した事件ではなく、主君の中宮定子からその逸話を聞き、それをまるで目撃したかのように記したといういわゆる聞き書き章段と言われる段である。このように出仕以前の自分が実際目撃してもいないことをあえてこの作品の一素材として扱っているということから、このエピソードは作者にとって、とても印象深く、

3) 本論文の作品本文引用は新編日本古典文学全集『枕草子』による。

4) 沢田正子「枕草子の笑いとをかし」、『枕草子の美意識』1985 笠間書院17頁

愛着を感じる事件であろうという推測ができる。そして、この段の年時は中宮定子の父、中関白藤原道隆が亡くなるかなり前の時期になるので、いわゆる前期の栄華な時期の一コマであることが分かる。

このような栄華な時期のある日、一条天皇の乳母藤三位藤原繁子は、一条天皇のいたずらめいた画策によってさんざん笑われてしまう。本段の後半である次の本文を見てみることにしよう。

それを二つながら持ていそぎまゐりて、<sup>せん</sup>「かかる事なむ侍りし」と、上もおはします御前にて語り申したまふ。宮ぞいとつれなく御覧じて、「藤大納言の手のさまにはあらざめり。法師のにこそあめれ。昔の鬼のしわざとこそおぼゆれ」など、いとまめやかにのたまはすれば、  
 「さは、こは誰がしわざにか。好き好きしき心ある上達部、僧綱などは、誰かはある。それにやかれにや」などおぼめきゆかしがり申したまふに、上の、「このわたりに見えし色紙にこそ、いとよく似たれ」とうちほほゑませたまひて、いま一つ御厨子のもとなりけるを取りて、さしたまはせれば、「いであな心憂。これ仰せられよ。あな、頭いたや。いかでとく聞きはべらむ」とただ責めに責め申し、うらみきこえて笑ひたまふに、やうやう仰せられ出でて、「使に行きける鬼童は、台盤所の刀自といふ者のもとなりけるを、小兵衛が語らひ出だして、したるにやありけむ」など仰せられるれば、宮も笑はせたまふを、引きゆるがしたてまつりて、「などかくははからせおはしましぞ。なほ疑ひもなく手をうち洗ひて、伏し拝みたまつりし事よ」と、笑ひねたがりゐるたまへるさまも、いとほこりに愛敬づきてをかし。

さて、うへの台盤所にも笑ひののりて、局に下りて、この童たづね出でて、文取り入れし人に見すれば、「それにこそはべるめれ」と言ふ。「誰が文を誰か取らせし」と言へど、ともかくも言はで、しれじれしう笑みて走りにけり。大納言、後に聞きて、笑ひ興じたまひけり（一三二 円融院の御果ての年）

円融院の諒闇が明けた、ある雨の日、藤三位のところに送り主の分からない手紙が届く。その日は物忌みだったので、翌日、丁寧に開けてみると、筆跡は法師のものらしく、それに諒闇明けを題材にしている歌が書いてあった。送り主が誰かと気になる藤三位は、以前円融院の別当だった藤大納言がその送り主かと思い返事を書く。手紙とともにこの次第を中宮と一条天皇に申し上げる藤三位。だが実の手紙の送り主はなんと一条天皇であることを白状され、自分がだまされたと思った藤三位は悔しがり、抗議しながら笑う。作者は、藤三位の抗議の様子を叙述したうえ、このように中宮や定子に笑われて、自分も悔しがりながら笑う藤三位に対して「いとほこりに愛敬づきてをかし」と評している。この評に対して新編全集『枕草子』の校注者は、「君寵あればこそこうしたいはずらの対象とされることを「ほこりか」に思うべきなのであろう」<sup>5)</sup>と指摘している。このような指摘から、いたずらの対

象とされることすなわち笑われることが、主君からの寵愛を確認できる場面であるということが言えよう。

これからは、この笑われている藤三位、藤原繁子という人物について少しふれてみることにする。藤原繁子については、諸資料によって次のような事項が確認できる。

- ・ 藤原師輔の女
- ・ 寛和二年（九九八）七月に典侍となる。後に従三位に叙せられる。
- ・ 一条天皇の御乳母となる。
- ・ 甥の藤原道兼との間に尊子を儲ける、尊子を一条天皇女御として入内させる。
- ・ 道兼死後、平惟仲と結婚する。
- ・ 正暦三年正月惟仲の任地である太宰府に下る。

上のような藤原繁子の経歴の中から、次のような事項は作者清少納言と関連づけて考えることができる。これからは次のような事項と作者清少納言との関連について考察していこう。

- ・ 藤原師輔の女
- ・ 乳母 典侍という職に就き三位という位まで上る

次は「生ひさきなく、まめやかに」の段である。

生ひさきなく、まめやかに、えせざいはひなど見てみたらむ人は、いぶせくあなづらはしく思ひやられて、なほ、さりぬべからむ人のむすめなどは、さしまじらはせ、世のありさまも見せならはさまほしう、内侍のすけなどにてしばしもあらせばやとこそおぼゆれ。（二二 生ひさきなく、まめやかに）

相当の身分の娘は、宮仕えをさせ、世間の有様を見聞きさせ、ならわせたいと言う作者、その具体的な職柄として典侍を挙げているが、これは藤原師輔の娘で、乳母・典侍として宮仕えを経験している藤原繁子の経歴にぴったりと符合していることが分かる。そして、作者の内侍の職に対する憧れは次のような段からも窺うことができる。

二月つごもりごろに、風いたう吹きて、空いみじう黒きに、雪すこしうち散りたるほど、黒戸に主殿司来て、「かうて候ふ」と言へば、寄りたるに、「これ、公任の宰相殿の」とてあるを見れば、懐紙に、

すこし春ある心地こそすれ

とあるは、げに今日のけしきに、いとようあひたる、これが本はいかでかつくべからむと思ひわ

づらひぬ。「誰々か」と問へば、「それぞれ」と言ふ。みないとはづかしき中に、宰相の御いらへを、いかでか事なしびに言ひ出でむと、心一つに苦しきを、御前に御覧ぜさせむとすれど、上のおはしまして、御とのごもりたり。主殿司は、「とくとく」と言ふ。げにおそうさへあらむは、いと取り所なければ、「さはれ」とて、

空寒み花にまがへて散る雪に

と、わななくわななく書きて取らせて、いかに思ふらむと、わびし。これが事を聞かばやと思ふに、そしられたらば聞かじとおほゆるを、「俊賢の宰相など、『なほ内侍に奏してなさむ』となむ定めたまひし」とばかりぞ、左兵衛督の中将におはせし、語りたまひし。(一〇二 二月つごもりごろに、風いたう吹きて)

二月の末、藤原公任から「すこし春ある心地こそすれ」という下の句を送られた清少納言、おそろおそろ上の句を付けて送るが、それが一気に殿上の人々の評判を得ることになる。その評判の中の「なほ内侍に奏してなさむ」というせりふを作者は、本段の末尾に書き記している。ここでは、二二段の典侍より低い位ではあるが同じ内侍の職に関する記述であるということから意味が深いと言える。本段のこのような叙述から、内侍の職に対する作者の憧れのまなざしが読みとれよう。このような内侍の職に対する作者の憧れについて、湯本なぎさは

作者には望んでも叶えられない地位が、典侍、掌侍＝内侍であった。作者は、その才能をもって「なほ、内侍に奏してなさん」と、君達に評された時には嬉しさを感じもした(一〇二段)だけに、一層羨望の念を増したであろう<sup>6)</sup>。

と、内侍の職に対する作者の羨望の気持ちを指摘している。こういった内侍の職に対する作者の憧れは、次のような「女は」という段からも窺うことができる。

女は 内侍のすけ。内侍。(一六九 女は)

また、作者の内侍の職に対する思いは次のような段の内容からも窺うことができる。

女こそはなほわろけれ。内わたりに、御乳母は、内侍のすけ、三位などになりぬれば、重重しけれど、さりとしてほどより過ぎ、なにばかりの事かはある。またおほやうはある。受領の北の方にて国へくだるをこそは、よろしき人のさいはいの際と思ひてめでうらやむめれ。ただ人の上達部の北の方になり、上達部の御むすめ後にゐたまふことは、めでたき事なれ。(一七九 位こそなほめでたきものはあれ)

6) 湯本なぎさ『枕草子大事典』264頁

上記の本文で、女性の最高の出世の道として内侍のすけや乳母の職に就き三位まで上ることを提示しながらも、「さりとしてほどより過ぎ、なにばかりの事かはある」と否定的な批評を記してはいるが、これに対して、湯本なぎさが「一方で内侍の地位を突き放して見せるのも、それに固執する作者の歪んだ感情の逆接的表白<sup>7)</sup>」と解いているように、これもまた内侍の職に対する関心や羨望の現れと言えよう。そして、このように作者が提示した女性の最高の出世の道をたどった人物の一人が他でもなくこの藤三位であることはとても興味深いこととなろう。

以上、藤三位、藤原繁子の経歴と作者との関連について考えてみた。典侍、一条天皇の乳母という職に就き三位という位まで上り詰めたという経歴は、作者の憧れの対象になりうるものであると言える。このような経歴を持つ藤三位が君寵の故、主君側に笑われ、自分自身も「ほごりかに」笑ったという話は、まさに宮仕えを通して女性として最高の立身出世の道をたどり、しかも宮中の一員として認められた一例として作者の耳にとっても印象深く聞こえたのであろう。このように笑われることを君寵の確認として憧れのまなざしで眺めていた作者は、いよいよ自分自身もそのような体験を味わうことになる。

## 二．「職の御曹司におはしますころ、西の廂に」の段で 笑われる清少納言

この段の記事は長徳四年（998）年末から翌年の長保元年（999）正月までのことと推定され、道隆没後の後期の記事を記録した章段であることが言えよう。この章段で、清少納言は中宮の画策により、騙され笑い者にされる。

二十日まゐりたるにも、まづこの事を御前にも言ふ。「身は投げつ」とて、蓋の限り持て来たりけむ法師のやうに、すなはち持て来しがあさましかりし事、物の蓋に小山作りて、白き紙に歌いみじう書いてまゐらせむとせし事など啓すれば、いみじく笑はせたまふ。御前なる人々も笑ふに、「かう心に入れて思ひたる事をたがへつれば、罪得らむ。まことは、四日の夜、侍どもをやりて取り捨てしぞ。返事に言ひ当てしこそ、いとをかしかりしか。その女出で来て、いみじう手をすりて言ひけれども、『仰せ言にて。かの里より来たらむ人に、かく聞かすな。さらば、屋うちこぼたむ』など言ひて、左近の司の南の築地などにみな捨ててけり。『いとかたくて、おほくなむありつる』などぞ言ふなりしかば、げに二十日も待ちつけて

7) 湯本なぎさ『枕草子大事典』264頁

まし。今年の初雪も、降りそひてなまし。上も聞しめして、『いと思ひやり深くあらがひたり』など、殿上人どもなどにも仰せられけり。さてもその歌語れ。今は、かく言ひあらはしつれば、同じ事、勝ちたるなり」と、御前にも仰せられ、人々ものたまへど、「なでふにか、さばかり憂き事を聞きながら啓しはべらむ」など、まことにまめやかにうんじ、心憂がれば、上もわたらせたまひて、「まことに年ごろは、おぼす人なめりと見しを、これにぞあやしと見し」など仰せらるるに、いとど憂くつらく、うちも泣きぬべき心地ぞする。「いで、あはれ。いみじく憂き世ぞかし。後に降り積みて侍り雪をうれしと思ひはべりしに、『それはあいなし、かき捨ててよ』と仰せ言侍りよ」と申せば、「勝たせじとおぼしけるななり」とて、上も笑はせたまふ。(八三 職の御曹司におはしますころ、西の廂に)

八三段は職の御曹司に作った雪山がいつまで残っているのかを賭けたが、中宮のいたずらめいた画策により負けてしまったというエピソードがはいっている段である。ところが、この雪山に関するエピソードは「一三二円融院の御果ての年」の段と内容において、いくつかの類似点を持つ。この両章段の類似関係は、すでに上坂信男によって指摘<sup>8)</sup>されているのであるが、もう少し具体的にその類似点についてみてみることにする。

### 1、類似点一、中宮や天皇のいたずらめいた画策に騙される

「円融院の御果ての年」の段では、天皇の画策に藤三位が、「職の御曹司におはしますころ、西の廂に」の段では、中宮の画策に清少納言がそれぞれ騙されていることが分かる。

### 2、類似点二、騙されている対象が、全くそれに気づかず真剣に振る舞い、それを画策した側に報告する。

藤三位は、天皇のいたずらの画策とは全く知らず、「つとめて手洗ひて、「いで、その昨日の巻数」とてこひ出でて、伏し拝みてあげたれば」と法師からの巻数だと信じ込み、手を洗って、その手紙を取り、伏し拝んで開けてみる。そして、藤大納言という人物に手紙の返事をする。また、このような事の次第を画策側である中宮に報告する。一方、清少納言は、「身は投げつ」とて、蓋の限り持て来たりけむ法師のやうに、すなはち持て来しがあさましかりし事、物の蓋に小山作りて、白き紙に歌いみじう書いてまゐらせむとせし事」と中宮が雪山を掃きすてたことは全く知らず、苦心して歌を用意したりする。そして、このような事を画策側の中宮に報告する。

### 3、類似点三、騙されたことが分かった時点で画策側に抗議する描写がある。

8) 氏は「帝と中宮と共謀して女房をかついで笑い興じる話は、「雪の山」の段に似ている」と指摘している。上坂信男、神作光一『枕草子(中)』講談社学術文庫 2001年 172頁

自分が騙されていたことに気づいた藤三位は

「いであな心憂。これ仰せられよ。あな、頭いたや。いかでとく聞きはべらむ」とただ責めに責め申し、うらみきこえて笑ひたまふに

と一条天皇に抗議するが、この藤三位の言辞に対して、新編全集『枕草子』の校注者は「主上に対する言葉として、やや敬意が薄いようであるが乳母としての親しさからであろう<sup>9)</sup>」と指摘、こういう指摘からこのような場面が藤三位と中宮・天皇との親しい関係から生まれてくるものであることが分かる。また、藤三位は「引きゆるがしたてまつりて、「などかくははからせおはしませど。なほ疑ひもなく手をうち洗ひて、伏し拝みたてまつりし事よ」と、笑ひねたがりゐたまへる」と自分が騙されたことに対して、中宮を引っ張って揺すぶるような行動を取りながら抗議をするのだが、新編全集の校注者はこの行動に対して「やはり主上の乳母である親しみと師輔の娘という出自の高さからの遠慮なさであろう<sup>10)</sup>」と、親密な関係と身分の高さを取り上げて説明している。

以上のように、騙されたことに対する藤三位の抗議は主上側との親密な関係によるものであるということが言えよう。一方、八三段の清少納言の場合は次のような抗議の弁が見られる。

「なでふにか、さばかり憂き事を聞きながら啓しはべらむ」など、まことにまめやかにうんじ、心憂がれば、

「いで、あはれ。いみじく憂き世ぞかし。後に降り積みて侍りし雪をうれしと思ひはべりに、『それはあいなし、かき捨ててよ』と仰せ言侍りしよ」と申せば

上のような清少納言の騙されたことに対する抗議の弁は、藤三位の場合に照らしてみると、これもまた、中宮側との親密な関係故のものとも見ることができる。

#### 4、類似点四、君寵を意識するような叙述が見られる

「円融院の御果ての年」の段においては、「いとほこりに愛敬づきてをかし」という部分が君寵故の得意げな様子の描写と見ることができる。

一方、「職の御曹司におはしますころ、西の廂に」の段には、「まことに年ごろは、おぼす人なめりと見しを、これにぞあやしきと見し」という、天皇のお言葉に、「いとど憂く

9) 松尾聡 永井和子 校注 新編古典文学全集『枕草子』小学館 1997年 252頁

10) 松尾聡 永井和子 校注 新編古典文学全集『枕草子』小学館 1997年 252頁

つらく、うちも泣きぬべき心地ぞする」という反応を見せている叙述が存在し、これも清少納言の、中宮定子からの君寵に対する意識の表れと言えよう。

以上のような、両章段の類似点は果たして何を語っているのであろうか。それについて考えてみることにしよう。

清少納言は、初出仕の時から、宮中の一員になることに憧れると同時に、その宮中社会の集団あるいは共同体に存在する〈笑ひ〉に憧れの念を寄せていた。そして作者は、そのような宮中社会の中の〈笑ひ〉を身近なものにできる日を待ち望んでいたのであろう。

中宮から拝聴した藤三位が笑われる逸話は、そのような「笑ひ」の最中に、藤三位の身が置かれ、宮中社会の中心的存在である中宮や天皇に君寵を受けていることを確認できた逸話として、作者の頭の中に印象深く焼き付いたのであろう。そして、このような理由により、作者が直接目撃体験した事件でもないにもかかわらず、この記事が本作品の素材として選定されたというような見方も成立できよう。

ところが、作者が宮中のれっきとした一員になっていた頃、作者自身もこのような〈笑ひ〉による特別扱いを享受できる機会に恵まれる。それがあの八三段の雪山にまつわる記事なのである。作者は、このように中宮に騙され、笑われることを、出仕当初から憧れていた宮中の一員になるという憧れの実現として、この八三段の雪山の記事を回想し書き記したという見方も可能となる。

## おわりに一 〈笑ひ〉に対する新しい見方への提示

以上のような考察を通して、〈笑ひ〉という現象が宮中生活に憧れ、その社会の一員になることを願ってやまない作者にとって特別なものであったと言える。〈笑ひ〉は作者に宮中社会の人々によって構成された集団の一員であることを確認してくれるものであった。

清少納言は出仕当初このような〈笑ひ〉に直接参加できず、ただ眺めていたのだが、宮中になれ女房としての地位が確立されるにつれて、積極的にこのような〈笑ひ〉の場に参加、「笑ひ」を眺める立場から、だんだん〈笑ひ〉に直接参加、〈笑ひ〉を主導していく立場に立つことになる<sup>11)</sup>。

〈笑ひ〉はまた、君寵を確認できるものでもあった。彼女にとって主君に笑い者にされるの

11) 三田村雅子は、明るい時期には多くの笑わせ手が存在することに対して、暗い時期においては笑わせ手が清少納言一人に絞られると指摘している。もちろん、この指摘は定子サロン女房としての立場をふまえての指摘となろうが、別の見方をとれば、清少納言の女房としての成長をも意味する反証となろう。だが、この件に関しては今後の課題として綿密な考察が必要となろう。三田村雅子「枕草子の〈笑ひ〉と〈語り〉」『枕草子 表現と構造』有精堂 1994 108頁

は、主君に愛されていることであった。

このような観点から見た時、〈笑ひ〉を主君の定子家の栄華記と没落期における表現方法の変化を追究する見方の他に、主君は没落していくが、清少納言自身は、時間が経つにつれ宮中の一員となり、女房としての地位も確立していくその成長の軌跡としてその〈笑ひ〉の場面を回想、実際あったはずの〈笑ひ〉を本作品に素直に書き記したという見方も可能となる。

## 【参考文献】

- 原岡文子（1977）「枕草子」日記的章段の笑いについての一試論「平安文学研究」  
（1991）「『枕草子』日記的章段の「笑い」をめぐって」『源氏物語 両義の糸』  
有精堂に所収
- 沢田正子（1985）「枕草子の笑いとをかし」『枕草子の美意識』 笠間書院 17頁
- 三田村雅子「枕草子の〈笑ひ〉と〈語り〉」『枕草子 表現と構造』有精堂 1994  
108頁
- 松尾聡 永井和子 校注・訳（1997）新編古典文学全集『枕草子』 252頁 264頁
- 上坂信男、神作光一（2001）『枕草子（中）』講談社学術文庫 172頁
- 枕草子研究会（2001）『枕草子大事典』 勉誠出版 264頁

## 要 旨

『枕草子』 「宮にはじめてまゐりたるころ（一七七）」の段には、まだ宮中生活に慣れず定子中宮の前で身を臥している作者の姿と、宮中を生活の場として自由に行き来しながら〈笑ひ〉を見せている女官の姿が対照的に描かれている。この段から、作者は初出仕当時の慣れない自身の姿を回想するとき、〈笑ひ〉が存在する宮中のコミュニケーションの輪の外側に自分がいたことをはっきりと覚えていたということが言える。『枕草子』 「円融院の御果ての年（一三二）」の段と「職の御曹司におはしますころ、西の廂に（八三）」の段には、それぞれ藤三位、清少納言が笑われ者になって登場しているが、この両章段はいくつかの類似点を有する。そして、藤三位は彼女の出生や経歴から見て、清少納言が理想とする女性像の条件を備えていたことが分かる。初出仕のときから、宮中の一員になることに憧れると同時に、その宮中社会に存在する〈笑ひ〉にも憧れの念を寄せている作者。作者はそのような宮中社会の中の〈笑ひ〉を身近なものにできる日を待ち望んでいた。一三二段では、藤三位が笑われ者として登場している。しかし、作者にとってこのエピソードは、宮中の中心的存在の中宮や天皇の藤三位に対する君寵を確認できるものであった。このような理由により、作者が直接目撃体験した事件でもないにもかかわらず、この記事が本作品の素材として選定されたと見ることもできる。そして、作者が宮中社会のれっきとした一員になっていた頃、今回は作者自身がこのような〈笑ひ〉による特別扱いを受ける機会に恵まれる。それが八三段の雪山にまつわる記事なのである。作者は、中宮に騙され笑われることを、出仕当初から憧れてきた宮中社会の一員になることの実現であるとして、この八三段の出来事を回想し書き記したという見方も可能である。清少納言は出仕当初、〈笑ひ〉に直接参加できず、ただ眺めていたのだが、宮中に慣れ、女房としての地位が確立するにつれて、積極的に〈笑ひ〉の場に参加、〈笑ひ〉を眺める立場から、〈笑ひ〉を主導していく立場に変わるのである。このような観点から見ると、〈笑ひ〉にまつわる叙述に、主君定子及び定子一家の栄華期と没落期叙述における方法的变化を追究する見方の他に、主君は没落していくが、清少納言自身は、時間が経つにつれ宮中の一員になり女房としての地位も確立していくその軌跡として、数々の〈笑ひ〉の場面を回想し、素直に本作品に書き残したという見方も存在する。

キーワード：〈笑ひ〉 〈枕草子の笑ひ〉 〈枕草子の表現〉 〈主君に笑われる〉  
 〈主君に愛される〉 〈藤原繁子と清少納言〉 〈笑われる〉 〈愛される〉

투 고 : 2010. 2. 28  
 1차 심사 : 2010. 3. 13  
 2차 심사 : 2010. 3. 27